

SEED (シード)

Vol.006
2022.11月

令和4年度「駒大生社会連携プロジェクト」も後半戦！各プロジェクトいろんなイベントを行っています。今号では、5つのプロジェクトの活動内容のレポート、そして前号に続き「駒大生社会連携プロジェクト 合同学生インタビュー」の様もお届けします。

〔産官学連携部門〕

社会連携ゼミ交流会（経済学部：大前智文先生）

社会連携活動をゼミ活動に取り入れるなど関心・実績がある学内ゼミが一堂に会し、参加者間の情報交換や連携・交流活動を活発化させる「**社会連携ゼミ交流会**」が本年度も**12月17日（土）14：00**から**種月ホール**で開催されます。新型コロナウイルス感染症の流行第8波の影響が懸念されますが、できる限りの感染対策を実施したうえで対面での開催を予定しています。

昨年度は初めての取り組みとして手探りの状態でしたが、参加ゼミの皆さんのご協力・ご尽力によって、大いに盛り上がりました。写真は昨年の様子です。

本学の社会連携活動を集約するとともに、結節点としての機能を発揮し、参加者間の相互交流や今後の連携の起点となるような対面のコミュニケーションの場となることを期待して、多くの方々のご参加をお待ちしております。



昨年度の様子



昨年度の様子

〔産官学連携部門〕

難民を知り、共生へ ～クルド人に学ぶ～（法学部：三竹直哉先生）

『東京クルド』の上映会の日程・会場が**12月17日（土）9：30**から**3号館403教場**に決まりました。当日は『東京クルド』の日向監督の講演会も行います。上映会まで約1ヶ月となり、集客に向けてポスターの作成や他大学の学生団体とコンタクトを取っています。

授業ではクルド人の方が体験した出来事を追体験的に考え、上映会を通して伝えたい思いをまとめました。まとめた思いを上映会の際に配布する予定です。

今後は、クルド人と同様の立場にある、ミャンマーにおける少数民族のシャン民族の方が経営している飲食店に訪問しインタビューを実施します。「難民を知り、共生へ」というテーマのもと、クルド人や難民についての周知活動を引き続き行っていきます。



当プロジェクトの
Instagramはコチラ

〔産官学連携部門〕

産学連携による新商品開発と新たな販路開拓の実践プロジェクト（経済学部：吉田健太郎先生）

私たちは地域活性化について体験型観光という切り口から研究を行っており、11月3日に静岡県のお茶企業である「蔵屋鳴沢」様と茶摘み体験をお茶の購買につなげるための販売戦略における仮説を検証しました。

具体的には、デプス調査から発見した顧客のニーズである「その地ならではの文化や歴史を活かした、そこしかできない体験」をもとに、蔵屋鳴沢の富士山が見える茶畑の景色やお茶の専門性を活かした『利き茶・茶道体験』のイベントを実施しました。

結果として、当初の目標の1.5倍もの数を販売することに成功しました。アンケートでも比較的高い評価をいただくことができました。

また、実際のコミュニケーションの中で、「宣伝をもっと大々的にした方がいい」「こんな綺麗な景色があるなんて知らなかった」などたくさんのコメントをいただくことができ、地場産業や地域の成長につながる、顧客との『共創価値』への第一歩になったのではないかと思います。



〔世田谷区部門〕

地域プロジェクトによる市民育ち—用賀と深沢における参加型調査研究（文学部：李妍焱先生）

様々な市民的活動の背景を持つ方々へのインタビューが終わり、現在はインタビューデータを分類ごとに分けたり、まとめたりする作業を進めています。これらの作業を通して市民性の共通点についても様々な気づきがあり、とても興味深く理解を深めていくことができます。

また、今月13日開催予定だった「おかしのまちづくり」は参加者とフードドライブの寄付が集まらず中止となりました。企画については、対象を小学校高学年以上、と絞りすぎたことが敗因です。さらに、必ず保護者と参加するという条件つきにしたことで、思春期・反抗期の子どもたちが参加しづらくなってしまったと思われます。悲しいですが今後の企画に反省を活かせるように善処します。

最後になりますが、8月に参加した「用賀サマーフェスティバル」についてのnote記事も完成いたしました。私たち李ゼミのアカウントにて公開しているので、是非ご覧ください。

<https://note.com/yanyanzemi/n/nb3f8f370678e>

〔世田谷区部門〕

動画制作を通じた「せたがやの居場所」発信プロジェクト（経済学部：松本典子先生）

10月28日にNHKサービスセンターの星野さんから、『撮影勉強会』として、撮影の仕方に関する講義をしていただきました。映像の特性や撮影のポイントを学んだ上で、テーマに沿って、30秒の動画リポートを作成するという演習を行いました。ゼミ生ひとりひとりの動画リポートに、改良点やアドバイスをしていただき、とても勉強になりました。

11月11日には、オンライン・ワークショップを行いました。『構成討論会』として、動画を作成する上での、構成を把握することの重要性を学び、各グループで考えた構成表をもとに、意見を出し合いました。

今後は、各グループで取材を始めていながら、ポストイットの構成を話し合い、深めていきます。



〔社会連携センター：プロジェクト見学レポート〕

経済学部：長山 宗広先生のプロジェクトの活動を見学しました。

世田谷区部門で採択された、経済学部の長山 宗広先生のプロジェクトが、11月5日・6日のオータムフェスティバル期間中に行った「世田谷デジタルものづくりフェス」を見学しました。

大変盛況で、多くの親子連れで賑わっていました。会場となった種月ホールは入口付近から学生たちによる創意工夫を凝らした装飾が施されており、子どもたちの関心を一層喚起させていました。各ブース、熱心な指導と子どもたちの真剣な表情、そしてそれを見守るご家族の温かいまなざしが印象的でした。



21世紀スキル × デジタルものづくり

世田谷デジタルものづくりフェス 2022

入場 無料!

2022年11月5日(土) 13:30-17:00
11月6日(日) 10:00-17:00

世田谷の小学生 集まれ~!

プログラミングで ロボットを動かそう!

プログラミング 未経験者歓迎!

気軽に ご参加 ください

会場 駒澤大学 種月ホール

11月5日(土) オープニング特別講演
「Web3とは?」
Windows95の父・中島聡氏による
講演会(シニアから生中継)
開催日 11月5日(土)
開催時間 12:00~13:00
【対象】大学生

楽しいコンテンツも 盛りだくさん!

QRコード

<https://setagaya.jp/>

〔社会連携センター：プロジェクト見学レポート〕

令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 合同学生インタビューを開催しました。

10月14日（金）に、駒沢キャンパス3号館 9階 912教場で、今年度の採択プロジェクトのメンバーである学生を対象に、社会連携センター主催の【令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 合同学生インタビュー】を開催しました。

今回は7つの採択プロジェクトから下記の4プロジェクトにご参加いただきました。

- ・松本 典子 先生のプロジェクト
- ・李 妍焱 先生のプロジェクト
- ・吉田 健太郎 先生のプロジェクト
- ・三竹 直哉 先生のプロジェクト

前号に引き続き、このインタビューの様をお知らせします。



令和4年度駒大生社会連携プロジェクト合同学生インタビュー（その2）

ーそれでは今日集まったプロジェクト同士でお互いに質問をしてください。

●「伝えたいことをどのように伝えるか、を考えること」 ～松本 典子先生プロジェクトへの質問～

- 李 P J : NHKサービスセンターの方に動画編集などを学んでいるとのことですが、そこで学んだことが将来どういう場面で活かされると思いますか？
- 松本 P J : 動画編集はまだ始まったばかりで、まだ事前の企画書や構成表を作る段階ですが、撮影した動画から、どの部分を切り取ってどう伝えるか、そして、伝えたいことをどのように伝えるか、を考えることは、日常生活でも必要なことだと思っています。
- 吉田 P J : 動画を通して、自分たちが一番伝えたいことを伝えるためにどういう工夫をしていますか？
- 松本 P J : 取材の場で相手の方がおっしゃった内容を、まず私たち自身がくみ取って理解し、どういことを伝えたいのかを私たちが考えて、動画にしていける必要があります。相手の方の気持ちをくみ取ることが一番大切だと思っているので、動画にしたときにそれが伝わればいいなと思います。
- 三竹 P J : 私たちの今後のプロジェクトの参考とさせていただきたいので取材やロケを行う過程で直面した問題とそのときの対処法などを教えてください。
- 松本 P J : ある団体が事前インタビューを実施した後に、撮影NGということになりました。とても取材したかった団体だったのですが、実際に撮影を行うとなると、その現場にいらっしゃる方が映ってしまうのでやはり対応できない、ということになり断念しました。新たに撮影をさせていただける団体を探しています。



●「お祭りの主催者は、お祭りを楽しむことはできませんね（笑）」
～李 妍焱 先生プロジェクトへの質問～

○松本 P J : 『用賀サマーフェスティバル』や『ふかさわの台所』という活動に、実際に中に入って参加している、とのことですが、実際に参加してわかったことや、参加する前と参加した後のイメージの違いを教えてください。

●李 P J : 『用賀サマーフェスティバル』について、今までお祭りは参加したことしかなく、今回はじめてお祭りを催す側にまわりましたが、当たり前ですがお祭りを楽しむことはできませんね（笑）。やるのがいっぱい、あれが足りないこれが足りないといって買い出しに行ったり、あの人にこれを伝えなきゃといって連絡のために奔走したりしていました。ただ、参加する側じゃ味わえない「やりがい」を味わえたので、良かったなと思います。『ふかさわの台所』のような地域プロジェクトに参加する前までは、地域のためのプロジェクトなので、周辺の地域の方たちもウェルカムみたいな感じで上手く物事が進むのかと思っていましたけど、騒音問題や運営費不足といった問題などきれいな事だけじゃすめられないんだなと思いました。

○吉田 P J : イベント運営メンバー間の方向性の違いや大変だったこと等どうやって乗り越えましたか？

●李 P J : 『用賀サマーフェスティバル』では、出店やステージ企画、バー、広報など、各セクションにわかれ運営していました。セクションごとにそれぞれ課題があり、こうしたいけどうまくいかない、といった方向性の違いからくる衝突もありましたけど、当日が近づくにつれて、いろいろうまくって問題も解決していき結果オーライとなりました（笑）。

○三竹 P J : 私たちもこの後、映画の上映会の開催を予定していますが、イベントの集客や告知方法についてアドバイスをお願いします。

●李 P J : 『ふかさわの台所』でのイベントの場合は、成見さんという世田谷区などにたくさんの関わりとつながりを持つ方がいたので助けていただきました。駒澤大学は「ちゃんとしている大学」、として信用してもらえているので（笑）さらに地域にいる人に紹介してもらえともっと信用度が高まると思います。

私たちの企画した「こども向けのイベント」は、ロコミや地域のママ友のLINEグループでどんどん広がって定員オーバーになりました。



●「アドバイスを理解して取組みに落とし込む作業が、頭が割れそうになるくらい難しいです（笑）」
～吉田 健太郎 先生のプロジェクトへの質問～

○松本 P J : 企業とのコラボや商品開発、販路開拓はどのようにすすめているのですか？また大変だったことや難しかったことを教えてください。

●吉田 P J : 商品開発は、連携相手の企業のことを知らないと難しいので、まず話を聞く機会を設けていただきました。「地域活性化」という私たちの研究テーマを伝え、調査を重ね、どうしたら私たちの強みを活かして企業の気づきにつながるか、ということを考えながら商品開発の打合せをさせていただきました。私たちの研究を経営者の方に伝えるのは難しく、いろいろ質問を受けながら、わかってもらうために粘り強く説明しました。それが一番難しかったところであり、最も大事なところだなと思います。



私たちはただ商品開発、販路開拓をしているわけではなく、それを通して、地域活性化を成し遂げる企業の発展に貢献したい、という研究の目的の達成に向けて取り組んでいます。

私たちは研究理論や先行研究を根拠に、商品開発やコンテンツづくりを考えています。

吉田先生からいただいたアドバイスを理解して取組みに落とし込む作業が、頭が割れそうになるくらい難しいです（笑）。

私たちは5～6人のチームで研究しているのですが、チームの中でも理解のすりあわせを行い、みんなで実践、アウトプットするのが大変だなと思っています。

○李 P J : 企業の方とプロジェクトを進めていく際に、どれだけ自分たちのやりたいことができるものですか？

●吉田 P J : マレーシアに向けたシュークリームの商品開発で連携している京都の企業の社長さんが私たちのチームのメンバーの親類の方ということもプラスに働いています（笑）。マーケティングや技術の面で企業の協力をいただきながら、新商品の提案をしています。このプロジェクトのゴールは「試食会」までですが、それ以降の販売については、試食会の反応によって決まっていくとのことなので、販売に向けて頑張ります。

○三竹 P J : 地域や海外の企業や社長の方々と連携されていて率直にすごいなと思いますが連携先はどうやって選定しているのですか？

●吉田 P J : 各チームの研究目的が達成できると思われる企業を選定し、連携しています。研究計画をたてる際にどのような相手と組みたいかという方向性が見えてくるので、それに合わせて顔の広い吉田先生が連携先を紹介していただきます。

そこから先のアポイントメントからは学生主体で行います。

他にも研究テーマに合致する企業を自分たちで見つけてコラボの打診を行ったチームもあります。



●「食を通して異文化を知ること」 ～三竹 直哉先生プロジェクトへの質問～

○松本 P J : 「クルド人」って聞きなじみがないのですが、日本との具体的な文化の違いなどを教えてください。

●三竹 P J : 「クルド人」と言われていますが、「クルド」という国はなく、トルコやイラン、シリアなどの中東の山岳地域に元々住んでいた人々で、戦争などによってその地を離れることになったという背景があります。

日本では埼玉県蕨市に2,000～3,000人と多く住んでいらっしやいます。日本とは、宗教や食文化に大きな違いがあります。テーブルを使わず地面にマットを敷いて手で食事をする、羊肉やイルミキ粉を使ったパンやピザなど食べる、といったところが日本と違いです。実際に私たちも夏休みにクルド人の食事をつくってみる会なども開催しました。



○李 P J : クルド人の方が抱える課題や歴史的な背景については本や新聞など調べることである程度はわかると思いますが、実際にクルド人の方にお会いして、感情的な面や本音などにどうやって迫っているのですか？

●三竹 P J : 難民の方々、クルド人の方への当事者意識について、私たちはそもそも知識が薄かったので、まずは文献や学术论文を読み、知識を得た上で、埼玉県蕨市に足を運びました。クルド人の方が多く利用するカフェ『ココシバ』では、日本語を学ぶクルド人の方の姿を見たり、日本語を教えている方にインタビューをしたりしました。その他、赤羽で行われた映画「東京クルド」の上映会にも参加し、「知る」というところから始めました。自分たちのことを知ってもらうことはまだ十分にできていませんが、実際にクルド人の方と深く関わってこられている方を通じて、私たちの思いを伝えていただき勉強しているところです。

○吉田 P J : クルド人の方との交流や、食文化の体験を通して、価値観の変化などありましたか？

●三竹 P J : 知らなかったことを、知る・触れる機会を自ら作ることで、新鮮な体験をすることができました。食文化について、玉ねぎを半分に切り、そこに羊肉のミンチを入れてオープンで焼く料理があります。各具材、それぞれは食べたことがあるのに、一緒に料理をすることで想像できない味となりました。



「食を通して異文化を知ること」で、より興味を持つことができ、他の料理や食べるシチュエーション、そして日本のように特別な日に食べるものへの関心、服装など、そういったところにも今後アプローチしていければと思います。



本日は長時間のインタビューをありがとうございました。
今年度のプロジェクト活動期間は2023年1月末までです。引き続き皆さん頑張ってください！！

令和4年度 ～駒大生社会連携プロジェクト 活動報告会～

今年度の駒大生社会連携プロジェクトの採択団体による活動報告会を
下記の日程で開催いたします。
今年度はオンラインでの開催を予定しています。
詳細は後日、大学ホームページ等でお知らせいたします。

開催日：2023年2月18日（土）※時間未定ですが午後からの開催を予定しています。
開催形態：オンラインでの開催

どなたでもご参加いただけます。

視聴申込方法など詳細は後日、大学ホームページ等でお知らせいたします。